# 「郷里での伝道」　マルコ６：１-６　平吹光太　２４.７.２１

これまでイエス様は力ある業を成されてきた。本日はイエス様がヤイロの娘を癒された町から郷里であるナザレの村に戻られて福音伝道をされる箇所。ここから共に教えられてまいりましょう。

I.　郷里で敬われないイエス様

**「イエスはそこを去って郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。安息日になって、イエスは会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。『この人は、こういうことをどこから得たのだろう。この人に与えられた知恵や、その手で行われるこのような力あるわざは、いったい何なのだろう。この人は大工ではないか。マリアの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄ではないか。その妹たちも、ここで私たちと一緒にいるではないか。』こうして彼らはイエスにつまずいた。イエスは彼らに言われた。『預言者が敬われないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。』」（1-4）**

イエス様は弟子たちと郷里のナザレの村に行かれた。そこはかつて父親のヨセフから大工仕事を教わった場所。そこは小さな村で顔馴染みの人達ばかり。安息日にイエス様と弟子達は神を礼拝するために村の会堂に行かれた。そこにはナザレの村の人達が集まっていた。その中でイエス様は講壇に立たれ、旧約聖書の巻物を開かれて朗読をし、説教をされた。それを聞いた人々は驚いた。なぜなら、今までの聖書を解き明かす教師達は口伝律法の解釈をさらに再度解釈して教えていたが、イエス様は聖書をご自身の権威で直接解き明かし教えられていたため。そして村の人々は、**「この人は、こういうことをどこから得たのだろう。この人に与えられた知恵や、その手で行われるこのような力あるわざは、いったい何なのだろう」（２）**と言った。彼らはイエス様の権威あるみことばの解き明かし、また実際に人々のために使われている知恵や力あるわざが行われていることに感心したと同時にイエス様に疑いの心を持った。確かにすごいがイエスはずっと大工職人ではないか。律法の教育も受けていないのになぜこんなことを教えられるのか？しかもマリアの子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄で、その妹達も私たちと同じ村に住んでいるではないかと村人達はイエス様を疑った。当時、子どもは親が生きていても死んでいたとしても「この人はあの父親の子です」と父親の名前で紹介されることが常識であった。しかし、「この人はあの母親の子です」と母親の名前で呼ぶ言い方は、父親が誰かわからないか、婚外子に対してであった。村人達はイエスが婚姻関係にない親から生まれたからとヨセフの子と紹介しなかった。この言い方は、マリアが村人達から軽蔑されていたことが分かる。つまりイエス様はこの時、大勢の人の前で不埒な親から生まれた子だと侮辱させられたということ。この時イエス様には４人の異父の弟達と少なくとも２人の異父の妹達がいたが村人達は彼らのこともとりあげて、イエス様やマリアだけではなく家族のことをいじった。※統計　※証し

こうして、彼らはイエスに「つまずいた」。この言葉は「信仰を拒む」という意味もある。また未来完了形で、「次々につまずいた」、「つまずき始め、つまずきっぱなしだった」というニュアンスが含まれる。つまり、この語からも分かるように村人達はイエス様が救い主であることを耳にし、実際、権威ある説教や奇跡を目の当たりにしていたにも関わらず、彼らはイエス様を自分達と変わらない土地の者、それ以下の身分として見たため、救い主として信じ受け入れられなかったということ。

そこで、イエス様は彼らの不信に対して当時の格言を用いられた。**「預言者が敬われないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」（４）**。本来、預言者は神の人として尊敬された。しかし、幼い頃から一緒に育ってきた人たちは神的側面ではなく、人間的側面に目がとまり適切な尊敬心を持つことが出来なかったため、このような格言が作られていた。これは決して、イエス様が何か負け惜しみや、尊敬されたいから言われたのではなく、神のみことばと恵みの招きを拒んでいることへの嘆きとして言われた。私達は身近な人に親近感を持ちますが、慣れ親しんでくると今まで持っていた魅力や尊敬が軽蔑に変わる。遠くから見ている分には欠点は見えないが、近くで見ると欠点が見えることがある。村人達はイエ

ス様が預言者であり、救い主であると耳にしながらも、生い立ちや家族の事で軽蔑心が生まれイエス様を信じなかった。
私たちも同じようなことはないか？年齢が年下の人、信仰歴が自分よりも短い人、小さい時から知っている人が、みことばを語っていたり、またみことばの分かち合いをしていても、偏見の目を持ち聞く耳を持たないってことはいないでしょうか？主はそのような思いを喜ばれません。そのような思いがあれば、正直に主の前に悔い改めさせて頂き、お互いに尊敬し合い、共に主のみことばに教えられてまいりましょう。

II. 信仰に応答されるイエス様

**「それで、何人かの病人に手を置いて癒やされたほかは、そこでは、何も力あるわざを行うことができなかった。」（５）**

ナザレの村人達はイエス様が救い主である証拠は十分に見聞きしていたが、イエス様を疑い、信じる事を拒否したばかりではなく、生い立ちや家族の事でイエス様をいじった。そのため、イエス様は何も力あるわざを行うことができなかったとある。ここからイエス様は私たちの信仰に応答される方であることが分かる。イエス様を信じてより頼む者には主の愛と恵みが与えられるが、イエス様を拒むなら主の愛や恵みを知ることはできないということ。

III. イエス様の愛で愛する

**「イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を巡って教えられた。」（６）**

イエス様は彼らの不信仰に驚かれた。家族、親族、友人への伝道はたやすくできることではない。関係が近ければ近い程、困難かもしれない。イエス様が言われた格言の通り、慣れ親しさは軽蔑を生むから。私たちがイエス様を信じて、これまで良いとは言えなかった言葉や行動や態度が主にあって全く変えられたとしても、神を信じる以前の自分を知っている家族、親戚、友人に軽蔑されるかもしれない。私たちは、気にさわるような事を相手から言われた時、肉の思いに従うのではなく、心の中で神に祈り、主に頼るなら、御霊の実**「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」（ガラテヤ 5:22-23）**に心を満たされて相手に接するようにさせてくださる。教会に来てほしい、イエス様に出会って救われてほしいのになんで話も聞こうともせず、逆に過去のことをほじくり返すのかと、もどかしい思いになる。そのような時、私たちは、イエス様を見倣いたい。イエス様は生い立ちや両親や兄弟のことを村人達に悪く言われても、言い争う事なく、彼らのために、また全ての人のために十字架の道を進まれました。私たちも過去の事で責められても言い争わず、素直にあの時はそうすることしか出来なかったと認めれば十分。**「兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。」（マタイ 7:3）**とイエス様が言われたように、私たちは人の失敗や気に食わない事を言いたくなる者ですが、人の事をとやかく言うのではなく、自分の心や態度を悔い改め主に仕えたい。日々のみことばで心、思い、考え方を養われ、御霊の実に満たされ、言葉がなくても、あなたの毎日の生活の愛ある態度や言動で主の素晴らしさを大切な相手に示す事が最高の証、伝道です。
本当に人を愛するとは、人の好意を買う事でも当てにする事でもない。本当の愛、人を愛するということを私たちはイエス様からしか学ぶことはできない。**「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、不正を喜ばずに、真理を喜びます。すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。愛は決して絶えることがありません。」（Ｉコリント 13:4-8）**イエス様はまさにこのみことば通りにこの世で歩まれ、十字架の死にまで従う程に私たちを愛し抜いてくださった。私たちはイエス様から受けているその愛を頂きながら、イエス様の後に従ってまいりましょう。